

【親鸞部門(高校)・中外日報社賞】

未来へ伝えたいこと

私立昭和学園高等学校 第3年 大垣いぶき

「たつえばあちゃんの所行くけど行く？」母はよくそう言って曾祖母へ会いに行っていた。コロナ禍になり会える機会は減ったが、私は少し遠いから面倒くさいなと思っていたので、行かないことが多かった。またすぐ会えると思っていた。

冬休み初日、突然母の携帯が鳴った。母は普段より元気のない声で「今から行く。」と言い電話を切った。夜遅くだというのにいろんな人が集まっていた。母と寝室へ行くとまるで寝ているかのように、安らかで優しい顔の曾祖母が眠っていた。「綺麗だな」誰もがそう思っていたと思う。本当に寝ているみたいだった。母たちは

「良かったね。こんな感じで終われて。綺麗だよ、ばあちゃん。」
と優しい声で曾祖母に声を掛けた。

帰りの車の中で「悲しいね。」と私が言うと母は「悲しいけど悔いはないよね。いっぱい会いに行ったし。」と言った。私はその時、たつえばあちゃんと最後に交わした言葉は何だっただろうと考えた。しばらく考えたけど思い出せなかった。凄く後悔した。「あああの時会いに行けば良かった」と心から思った。「なにかとコロナ禍だし会いに行くのも」と思い、会いに行かなかった自分を憎んだ。母や母のいとはコロナ禍だが、会いに行ける時は行って、行けない時はグループラインで曾祖母の写真を送り合い、曾祖母との時間を大切にしていた。いつ別れが来るかも分からないから、今を大切にしているのだと感じた。

私の夢は看護師だ。限られた時間で出来ることをしたい。思うのは簡単だけど行動に移すのは簡単ではない。でも対象の相手を想う気持ちがあれば、自然と行動していけると思う。時間は有限だから今を大切にすることをこれからずっと大事にしていきたい。